



第422回 4/4(火)「タムタムランニングクラブ」

代表 佐藤 心雄さん

「タムタムランニングクラブ」は活動理念「成長過程を大切にしながら結果（成長）に結びつける」を基に4歳～70代と幅広い年齢層の会員が所属するクラブです。代表の佐藤さんはクラブ運営と兼ねてインストラクター兼ランナーとして活動しつつ、湘南ビーチランアンバサダー、原FC（横浜市の小学生サッカーチーム）のランニングトレーナー、東京都小学校体育特別非常勤講師、大和みらい陸上教室アドバイザー等、多岐に渡る活動を続けています。

5/14(日)「リラックス走法講座」5/20(土)「湘南ビーチラン」をはじめとする盛り沢山のイベントスケジュールをぜひご確認ください。



(タムタムウェブ)



(タムタム公式ライン)

5月の出演 424回 5/2(火)「大和市民活動センター」 425回 5/16(火)「神奈川探偵倶楽部」 426回 5/30(火)「Story Time」

FMやまと 77.7MHz 第1.3.5(火) 生放送 9:00～9:30 同日再放送 15:00～15:30

第423回 4/18(火)「血管ケア de メンテナンス」

代表 小宮山 利恵子さん

「整膚」(せいふ)は皮膚を優しくつまむ施術によって全身の気血の流れを良くする健康法であると共にスキンケアをすることでリラックス効果も得られるそうです。

2022年7月に団体を設立後、大和市民健康都市大学のセミナーを中心にのべ400名に向けて講習を実施。食育と健康について学び続ける小宮山さんが考案した身体の細胞を整えるスープを広める活動も始めました。「整膚の魅力は知識が乏しくてもすぐに自分の指で実践できること」と語り、簡単に試せるセルフケア(レスキュー整膚)をいくつか紹介して下さいました。

今後の予定「細胞を整えるスープのデモンストレーション」  
6/24(土) 13:00～14:30 保健福祉センター3F 栄養指導室  
問合せ: 090-4718-5648 (小宮山利恵子さん)

TSUBASA's トーク 第19回「田園風景のドライブで聞いた話」

男って、女って、ってわけでないんだけど

就職活動で訪れた岩手県一関市で、「緑のふるさと協力隊」時代からお世話になっている70代の女性に市内を巡るドライブに連れて行ってほしい、田園風景を走る車の中で印象的な話を聞きました。

「男って、女って、ってわけでないんだけどさ、男って自分の病気のことを知りたがらないというか、『ここの診療所までにしてしよう』と怖がると思うんだ」

「女がしっかりしている家は盛り上がるというか、栄える気がするんだ。私は夫には家の経済のことは任せられねからっさ、私がやってんの。私がいるからあの家が成り立ってるんだよ〜(笑)」



一関の田園風景

「男は自分の病気を知りたがらない？」

この話を聞いて「なるほどな」と思いました。「男って自分の病気のことを知りたがらない」ということは、ある意味自分にも当てはまる気がしています。

今進路を決めて一関まできて就職活動していますが、ここでの決断で、自分の将来が少しわかってしまうような気がして、それが怖くて踏み出せない。別の可能性を捨て切れずにいる。これは自分の弱さであると思っています。でも今朝の朝ドラで松坂慶子が言っていました。「何かを選ぶということは、捨てるということ…」



就活のため盛岡へ

妹に叱られて想像した「女性」の性質

そして、確かに「女性」として生きている人たちには、現実的というか、柔軟な人が多いかもしれない。それは後天的で、色々な広告や社会の構造の中で適応するほかなかった、という場合もあるかもしれません。

これは実際の話なのですが、岩手での協力隊を終え、大和の実家で就職活動のために自室に籠って企業を調べていた時期がありました。調べ物が一段落して、居間で家族と夕食を食べるという時に、「この家は下宿先じゃないんだから、家のことは最低限やってほしいし、進路の話もしてほしい」と大学生の妹に叱られたのを思い出しました。その後、茶碗洗いと風呂掃除、買い物は積極的に手伝うようにしています。



一関でいただいた朝食

一関の方々のお家で家事を手伝う背景

実は4月末から連休にかけて、昨年度にお世話になった方々のお家を転々として一関に滞在しながら、就職活動をし、本コラムも書いています。滞在先の多くは農家さんのお家で「気にしないで泊まって」と言われるのですが、いつも朝食と夕食、それから寝具なども用意してもらっています。食事を作っている奥さんに「お手伝いしますよ」と声をかけても「大丈夫だから新聞読んでいて」と断られてしまいます。

でも、その度に妹の顔と「下宿先じゃないんだから」という言葉が思い起こされるのです。なので 最近は手伝う前提で「廊下か玄関の掃除のやり方教えてくださいませんか」と尋ねるようにしています。

最後にドライブに連れて行ってくれた女性から。「とか言いながら私、自分のものは高いものを買っているんだ。夫は2000円ぐらいの服で高いとかいうのに、結構自分にはお金かけてんの。」



玄関前の掃除

(サポーター 尾畑 翼)

大和市民活動センターは「大和市新しい公共を創造する市民活動推進条例」に基づいて設置されています。

「あの手 この手」 第190号 発行日: 2023年5月10日

大和市民活動センター <開館日 月～土 9:00～18:00>  
<休館日 12月29日～1月3日・毎月第3月曜日>  
〒242-0018 大和市民活動センター 1-2-17

発行: 大和市民活動センター 拠点やまと

TEL: 046-260-2586 FAX: 046-205-5788  
e-mail: yamato@ar.wakwak.com  
http://www.kyodounokiyoten.com/

あの手この手で考えて、あの手この手で問題解決!

あの手 この手

あの手この手のマークの間のSは solution(解決)のSです。

第190号 2023年5月10日 大和市民活動センター[拠点やまと] 発行

5月号  
2023

ペテルギウス玄関  
5月5日の生け花



表紙絵は「やまと国際フレンドクラブ」(IFC)主催  
2022「第15回やまと国際アートフェスタ」  
入賞作品を毎月掲載しています。

今回のテーマ ～平和・いま私にできること～

(株)永屋賞 狩野 凜桜さん (日本)  
福田小学校3年生(当時2年生)

タイトル:「みんなと手をつなごう」

メッセージ:「私たちの手と手をつなげば、地球でつながって、笑顔になって、戦争をしている国が戦争の気持ちなくなるんじゃないかと思って、この絵をえがきました。服は国旗の色にしています。」

「やまと国際アートフェスタ」は「やまと国際フレンドクラブ」(IFC) \*の主催で毎年開催されています。

\*草の根の国際交流、外国人支援を行いながら「ともにくらすまち 大和」を考えるボランティアグループです。

協働事業・市民活動推進補助金事業報告会を開催

令和4年度実施の活動内容を報告いたします。

と き: 令和5年5月29日(月) 13時～17時10分(予定)  
と ころ: 大和市民活動センター会議室2 定員: 16名  
申込み: 大和市民活動センターへ電話 (046-260-5103)

第102回 共育(ともい)セミナーを開催

ウイズコロナ、ポストコロナの時代の社会貢献活動 その6 農山村暮らしで体感したことを伝えたい  
「緑のふるさと協力隊」(岩手県一関市花泉町)に参加して

と き: 令和5年6月24日(土) 14時～16時  
と ころ: 大和市民活動センター会議室2 定員: 16名  
締切り: 6月21日(水) 申込み: 大和市民活動センター

「市民活動推進補助金」対象事業が決定

令和5年度事業について、公開プレゼンテーションと書類審査の結果、次の1事業(交付金額5万円)が決定しました。

事業名	団体名	事業内容
移動販売買い物支援・消費者と生産者等の交流事業	La graine (ラ・グレーヌ)	近隣にスーパーがない高齢者等の買い物支援として、生産者から供給される新鮮な野菜を届ける移動販売を継続して行う中で、消費者として集まる高齢者のふれあいの機会を設け、地域の交流を深めることなどを行う。





## ウイズコロナ、ポストコロナの時代

### 市民活動、NPO活動、社会貢献活動はどうあるべきか 先駆の人を訪ねて 第12回

## 異文化コミュニケーターとしての松本さんに 求められたのは仲介役 「寄り添うだけではだめ、学び合いが大切」②



## アルベルト松本 (Juan Alberto MATSUMOTO) さん アルゼンチン日系二世 (1962年生まれ、1990年から日本在住)

主な来歴: 国費留学生として来日 (筑波大学に在学)。横浜国立大学大学院で法律の修士号取得。渉外法務専門の翻訳会社設立 (1997)。NHK-TVE 放送通訳。Discover Nikkei-JANM コラムニスト・東京 & 横浜地裁法廷通訳。JICA 中南米日系研修員及び中南米日系社会 JICA 海外協力隊派遣前研修講師。2017年10月、JICA 理事長の「JICA 国際協力感謝賞」を受賞。2022年8月、外務大臣表彰を受賞。横浜市在住。大和市では「外国人市民サミット」のファンリテーターも務めた。横浜市在住。日本滞在歴33年。



戦後、1952年にブラジルへの移住が再開した。そして高度成長が本格化するまで、ふたたび移住熱は高まり、1973年までの間に6万人余の日本人が中南米をめざした。他方、日本の敗戦にともなう混乱に巻き込まれた日系社会も、日本からの新しい移民に期待を寄せた。そのため1950年代には2代目のぶらじる丸とあるぜんちな丸が建造され、両船だけで27,000人の移民を送り出した。戦後の南米移住も戦前と同様、主として農業移住だった。(JICA 横浜移住資料館展示資料から抜粋)

今号は前号に引き続き、アルベルト松本さんへのインタビューの後編を収録します。1990年6月1日の入管法改正法の施行によって、「定住者」の在留資格が創設されて、日系3世までに就労可能な地位が与えられました。その結果、大和市にはペルーやブラジルなどの南米諸国から日系人が多く在留するようになりました。このような中、アルベルトさんには、大和市の行政も国際化協会も、ペルーをはじめとした多くの南米出身の日系の方も大変お世話になってきました。そんな中で改めて、アルベルトさんの「異文化コミュニケーター」として、ペルー出身者を支援してきた実績、これからの日本社会の課題、そしてもちろん、アルベルトさん自身の日本社会で奮闘され、そのとてつもないご努力で、中南米日系出身者と日本社会の懸け橋となった来し方をご紹介します。

聞き手は、望月則男、船越英一 (インタビュー: 2023年2月14日)

— 松本さんはどのようにして、スペイン語を身につけたのですか

皆さんも外国語だけで、教育を受けてしまうと日本語を覚えないのと同じように、アルゼンチンで、スペイン語を理解しないと、「きちんとした教育を受けられない。いい学校に入れない」という弊害が出てきます

ぼくも小学校3年生ぐらいから家庭教師をつけてもらって、スペイン語をゼロから猛勉強しました。そうしないと、進学できないので。

— 日系社会では日本語しかできない人もいたのですよね。そうですね。一方、地域に日本語学校があれば、アルゼンチンの学校に行くしなくなります。そうすると、今度はスペイン語がメインになって、その子の日本人の両親もスペイン語を覚えざるを得なくなります

沖縄県出身の人は商売やクリーニング店を営んでいる人たちが多かったんですけど、そういう商売は都市部にしかないわけです。そうすると自然に日常会話がスペイン語になるので、子どもたちはほとんど日本語を話せなくなります。

日系社会の日本語学校で、毎日フルタイムで日本語を勉強していると、そのバランスが難しいのですが、逆にそれがよかったのです。

母語であるスペイン語もきちんと勉強し、毎日宿題もたくさんありました。だから、よく日本でもバイリンガルが

いいと言いますが、並大抵の努力では無理なんです。親御さんの努力、忍耐あと財力ですね。日本語学校は私塾ですから、相当なお金がかかるわけです。

— お父さまは相当苦勞されたのですよね。あとからわかったことですが、父は、古い和西辞書を持っていて、スペイン語を猛勉強していましたね

自分で野菜や花作りをしていると、人を雇わないといけない。それを売らないといけない。いろんな買い物をして、資材も買う必要がある。そのためにはスペイン語ができないと何もできないわけです。契約書も読まないといけないですし、父は相当勉強していたと思います。当時の日系移民の方々は大変な努力をしたと思います。

だから、ぼくはいつも日系外国人に大和市の「外国人市民サミット」などで、よく指摘をしていました。「大和市にはいろいろな外国人市民へのサポートがある。日本では、電話一本で相談センターにつながるけれど、自分で日本語をもうちょっと勉強しないとだめ。何かあった時に自分しか頼れないよ」って、いつも口うるさく言っていました

「さまざまな制度のことを日本語で覚えなさい」と。たぶん、それは親父 (松本さんのお父さん) の努力を見ていた移民の子としての体験が強く残っているからだと思いま

す。それしかないですね。そういう努力をしないと自立できないし、選択できない。いい高校、いい大学には進学できないです。南米の方が日本よりずっとシビアですから。

アルゼンチンでは小学生の時から選別されます。留年制度を徹底的にしています。年度末のテストに落ちたら、「チャオ (さよなら) って また来年来なさい」となります。先生は何もしてくれません。

だから、私たちは必死になって勉強しました。親に「勉強しなさい、勉強しなさい」って怒られながら。そうしないと、「どこどこのお兄ちゃんのようにいいところに行けないよ」って小さい時から言われ続けました。

— ところで、アルベルトさん、サッカーはしましたか。サッカーですか。ぼくね、アルゼンチン生まれなのに、サッカーのボールを蹴ったことないくらい、サッカーはできません

— ワールドカップで、アルゼンチンは優勝しましたが、集中力と遊び心というか、そういう天性のものがあるからだと思います

これじゃ無理だろうと思っていましたけど、勝っちゃいましたね。でも、メッシのような選手が集まっても、チーム作りは難しいです。あれだけ個性の強い選手たちの力を発揮させるのは、やっぱり監督の手腕です

トヨタカップとかキリンカップで、15年前ぐらいですけど、アルゼンチン代表チームを何回か日本が招聘しています。その時の通訳をさせてもらったことがあります。アルゼンチン代表に1週間、同行するわけですよ。彼らのキャンプ地、ホテル、日本との試合すべてに関わったので、大変でした。

当時、メッシはいなかったけれどもハビエル・サビオラなど有名な選手が何人もいたわけです。10人集まるとそれだけで100億円ぐらいのサッカー選手の集まりでした。

日本との親善試合といっても、彼らは、世界に自分たちを売り込みたいわけです。だから一生懸命やります。

そこに同行して、通訳をして、サポートをするというのは、すごく神経を使います。この仕事を1週間すると、1週間は寝込みます。サポートは3人体制なのですが、広報、サッカーの技術的なサポートもやらなくてはならなくて、それはもう大変でした。

— 通訳をされる時の頭の中はどうなっているのですか。もう何も考えずに、パンパンと。とにかくスピーディにやらなければいけないので、事前にいろんなことを頭の中に入れてあります

彼たちのことも、大会のことも、あらゆることが全部動くわけです。なおかつ、ぼくは通訳といえども、ただアルゼンチン側に言われていることを日本側に伝える、日本側からの要望をアルゼンチン側に伝えるだけではありません。彼たちは駆け引きをするわけです。たとえば、要望をしても、いくら招聘しているとはいえ、日本側が応じられないものもあります。それを通訳がうまく時間稼ぎしながら処理していくわけです。

そういうコミュニケーション技術が求められます。日本

側には、これは要望ではなく、あくまでも打診だと伝えて、応えることは可能なのか、無理なのか、そしてできないのなら、タイミングを見計らってそれを伝えないといけないわけです。

また、チームでは監督が一番偉いけど、監督以外にスタッフが複数います。たとえば、助監督、医師、フィジカルトレーナーなど。それがすごく大事なんですけれど、この人たちにもいろいろな権限があるので、そこをうまくまとめて、よしよしよし…なんですね。(笑) いや、すごく疲れましたが、とても素晴らしい経験になりました。

— 外国に行ったら、(移民したら) 松本さんのように間に入るというか、通訳してもらえる人に出会うことは大切ですよ。ぼくらが海外に行った時も、駐在の人が面倒を見てくれますけど、そういう人がいる、いないは大きく違いますよね

違いますよね。ぼくがやっていることは一種の仲介なんです。クッション役です。そうでないと、異文化コミュニケーションはうまくいきません。言葉を伝えるだけじゃダメなんです

たとえば、大和市国際化協会の業務でも同じだと思うのですが、そのまま通訳したら、喧嘩になることがいっぱいあります。

— 松本さんの今のお仕事の原点のお話を伺っていきたくて、松本さんはアルゼンチンの大学を卒業されてから、国費留学生として来日されたのですよね

そうです。ぼくはブエノスアイレスの大学を卒業してから国費留学で、文科省の奨学金を得たので、1990年4月3日に成田空港に到着しました

なぜ覚えているかという、南米の人間から見ると、成田空港は「なんだ、この空港は」というくらい大きいからです。国費留学なので、在籍する筑波大学から迎えが来ました。その後、横浜国立大学大学院で国際経済法学の修士号を取得しました。

難しかったです。日本人でも法律用語って難しいじゃないですか。試験を受けて入学するんですけど、院生全員が法学出身の学生じゃなかったです。留学生もいたし、社会人もいました。日本だけではなく、外国の社会人、特に公務員も多かったです。日本の法制度を勉強しに来た人が多かったのですが、絞られましたね。

ぼくは、労働法を専門にしました。出稼ぎ問題が多かった時期なので、どうしても日本の法体系をもっと知りたいと思いました。どうして、ブローカーや派遣会社が契約を結んでも、労働者を守れないのか知りました。そこで派遣法で修士号を取りました。

— 松本さんご自身が 移民の子だから外国ルーツの人たちの支援をしたいという気持ちだったのですか

そういう気持ちはありましたね。通訳や在住外国人をサポートするのは、本当に大変な仕事です

厚生労働省の外郭団体で、相談業務にも10年ぐらい関わりました。相談に来る外国人に対応するには、適切な知





識がないとアドバイスができません。一方、通訳として、役所の人が言うことだけを伝えたら、それで問題が解決できるわけでもありません。

日本の仕組みや法体系、運営がどうなっているのかを、きちんと説明しないと、外国人は理解しませんから。ぼくや、ぼくの父親が苦労したことが頭に残っていますからね。

— 日本に来られたころ、アルゼンチンから見た日本はどんな国にみえましたか

**ぼくが日本を勉強したのが 1980 年代の半ばで、1990 年に日本に来たのですが、1985 年から、日本はバブル期に入り、とてつもない大国にアルゼンチンからも見えたのです** アメリカに次いで第 2 の経済大国といわれていて、ブエノスアイレスの大学でも、日本は今後とてつもない役割を果たす国だから、大学の先生は、ぼくが日系人ということもあって、「お前は日本に行ってきたと勉強したら、絶対にキャリアとしては間違いない」と言われていました。

— ご両親がブエノスアイレスに移住された時とは逆になったのですか

**逆になりましたね。大学の教授はぼくに「おまえはハポネス（日本人）だろう。今、日本はすごいぞ」**

当時、今みたいにインターネットもないわけですから。教授は「お前は日本語ができるんだから、日本に行って勉強して来い」、「それをわれわれ（教授）に教えて欲しい」と言いました。

大学の授業も忙しかったのですが、JICA の協力隊員に日本語を教わり、3 年ぐらいかけて日本への留学準備をしました。そして、ようやく日本に来たのですが、凄い競争でした。文科省の奨学金は 160 人応募して、日本に来られたのは 8 人でした。来るためには、ただ成績がいいだけでなく、誰が推薦状を書いてくれるかが重要でした。だから、大学時代から、自分なりの人脈をつくって、ボランティアに協力して、日本に行かせてくれと売り込みました。

— 日本に留学されて、奥さまと出会われたのですか

**結婚しました。アルゼンチン大使館で働いていた日系の友だちが紹介してくれて、彼女と出会って半年で違和感がなく結婚しました。出会ってそういうものでしょうね**

— それで、もうアルゼンチンに帰らず、帰れなくなったのですか（笑い）

**はい、日本でさまざまな仕事に就きました。1992 年から 98 年までペルーやブラジルからの就労者が大量に来ていた時期です。毎年、数万人単位で増えていたところで、あらゆる仕事の依頼が入って来たのです**

労働者の相談センターだけではなく、裁判所、警察、弁護士会からも。その後、ようやく大学からの依頼も来るようになりましたが、初めの 10 年ぐらいは行政機関からの仕事が多くて、翻訳も通訳もいわゆる相談業務も半端な数ではありませんでした。

そんなときに、NHK 国際放送で、スペインの TVE（テレビジョン・エスパニョーラ）という国営放送が、放送通訳ができるネイティブの人間を募集していて、声がかかり、採用されました。

— えっ、それはすごい。日本語をしゃべる際はどのよう

にするのですか

**スペインから衛星で、ニュースが入ってきます。それを翻訳して、きちんと原稿にまとめて、ニュース用語にして音声にします**

— 聞いている人は日本語で聞けるのですか

**そうです。ぼくたちの声が副音声で聞こえます**

副音声でスペインのニュースを日本語で聞いていただいているわけです。これをもう 27 年間やっています。

当初はもう大変でした。初めはそこまでの日本語レベルがなかったと思います。だけど、「君なら大丈夫」と言われて、スペイン語で聞いたものを迅速に日本語に翻訳してきたのです。

日本語も書いて、聞いてすぐにわかる人じゃないとだめなわけです。辞書を持って、ゆっくり、のんびりやっていたら時間が足りません。この作業を 3、4 時間の間に全部やって、収録をその場でして日本の皆さんに届けます。朝の 8 時半ぐらいからの放送なので、午前 4 時に仕事に入ります。



— すごいですね。ひょっとして 海外から来たスペイン語がすぐ日本語で書けるのですか

**瞬時に頭の中で、だいたいタイミングを見ながら、「たたた」と書いていくわけです。そのニュースの概要はすぐわかって、日本語でポンと言えます**

小学生のころは日本語の方ができたかもしれません。でもそのあと、中学、高校、大学はもう完全にエスパニョールだけだったので、現地の社会に溶け込んで、スペイン語で毎日生活をしていました。

日本に来てからは、筑波大の日本語教育センターの留学生向けの講座を受講して猛勉強しました。

新聞が読めないし、まして、文献なんて読めるわけがない。これは大変だと思って、1 年半で新聞を読めるぐらい毎日漢字を勉強しました。

勉強している時は、漢字そのものは難しかったと思いませんけど、勉強しないと前に進めないっていう危機感がありました。だから、南米から移民で来る人たちにも、「日常会話や生活に必要な会話ぐらいは勉強しなさい」といつも言っていました。「そうしないと誰も守ってくれないよ」と。

— やっぱり、根底の考え方が違う人の間を通訳するというのは言語だけ理解しただけではできないものではないですか

**難しいです。文化の違いもある。制度も違う。その制度の適用の仕方も違うわけです**

同じような法律体系でも、労働法とか民法も基本的な条文は世界中どこでも、同じようなことを言っています。でも日本には日本独特のものがあるわけです。その適用の仕方は国によって微妙に違います。

それを噛み砕いて説明しないと外国人は理解してくれないし、ときに反発するし、不理解を呼びます。日本に対して噛み付いてくるわけです。

ぼくの役割として、自分の専門である労働法だけではなく、日本の社会保障制度や税金、確定申告関係などについて、「とにかく日本はこうなのだから、こういうシステムなのだから、あなたは、こうして、こういう風にするとうスムーズに行くよ」と 30 年間スペイン語でわかりやすく説明して、彼たちに多くの情報を提供してきました。

条文がどうこうと言っても、日本人でさえ難しいことをペルー人、ブラジル人が理解するのは大変なことですから。

**この人たちに分かりやすく伝えるにはどうしたらいいか悩みました。噛み砕いて、やさしいスペイン語にするのはいいけれど、あんまりやさしくすると馬鹿にしていると思われて、伝わらない。逆に専門用語ばかりを使うと、「インテリを気取っている」と思われる。日本人もそうですが、そのバランスを取るのが難しかったですね**



アルゼンチンにいても、隣国の人たちと会うということはほとんどありませんでした。唯一クラスメイトにいたのはボリビアやパラグアイからの移住者でした。当時は「あなたたち、アルゼンチンのスペイン語を勉強しなさい」と上から目線でした。

でも、日本に来るとぼくも外国人だし、ペルー人やパラグアイ人などさまざまなスペイン語圏出身の人がいる。そして、ぼくはその人たちの文化を知らないわけです。食べ物も知らない。考え方も知らない。どんな教育を受けてきたかも知らない。それを理解するのに数年かかりました。

日本では、よく寄り添うという言葉を使いますが、寄り添うだけではなくて、互いに学び合うことが必要なのです。

同じスペイン語を使っているのに、なぜか通じない。彼らの生活と価値観が違うからです。南米といっても広いので、ペルー人のことを理解するためには、ペルーに行かなければと思い、20 数年前からペルーに 6 回は行っています。

— 外国人の文化や価値観などのバックグラウンドを理解した上で活動している松本さんのような専門家ってほかにいないですか

**面倒な作業ですから、そこまでみんなやらないのです。でもぼくは移民 2 世なので、できたのだと思います。あんまり苦にせず、楽しんでいたのでしょね**

ペルー人に面と向かって、「これはこうだから、ちゃんとやって」とは言いません。日本的で少し遠回りをした言

い方をしないと無視されてしまいます。同じスペイン語圏でも、直球勝負のぼくたちアルゼンチン人とは違うわけです。

だから、「ぼくも、あなたたちも時間がないでしょ。分からなかったら誰が損するの」と伝えます。

そうするとペルー人もわかってくれるようになって、ぼくの名前が全国に知られるようになりました。

結果として、90 年代に厚生労働省の外郭団体から依頼されて、日本全国を回って労働法や社会保障制度についての講演会を何十件とやりました。

そしてリーマンショック後は、日本人にとっても非常にシビアな状況でしたが、外国人はもっと大変でした。

— 最後に、在住外国人が増えている現在の状況下で、日本社会は少子化が進んでいて、技能実習生として入国した外国人が働いて日本社会を支えていると言われていて。このことをどう思われますか

**技能実習生にしても、留学生にしても、実態は出稼ぎ労働者であると、メディアも伝えています。日本側は、彼らを若い労働力としてしか見てない。技能実習生は、人手不足が深刻な業界が受け入れていて、一部の経済学者は、それはもう業界の延命措置でしかないと言っている状況ですね**

技能実習生は 34 万人ぐらいいるそうですけれど、国際的には、問題のあるやり方だと思います。

労働者が必要であれば、労働ビザをきちんと与えて、保険料、税金を払ってもらう一方で、権利も保証して欲しいわけです。

その人たちが移住者になるか、日本に定住するかは、その人たちが決めることであるのに、在留期間は最高 5 年までで、たとえば特定技能を取れば日本に定住できるような制度としているようでは、国際社会での信用は得られません。

留学生のように、学歴の高い人たちは日本で学位を取り、結婚して、仕事をして日本に留まる人もおおいいます。4、5 年ぐらいでほかの国に行ったり、帰る人もいるかもしれませんが、何十年も日本にいたら移住です。高学歴者の移住だと思います。

日本は、高学歴の人だけを欲しいと言うけれども、そういう人もいれば、そうではない人もいます。さまざまな外国ルーツの人が住んでいるわけです。もちろん人数の制限はあっていいと思いますが、技能実習生制度は改めた方がいいと思います。その方向で政府も動いているようなので、それは歓迎します。

